

愛社精神を高めるには

先日、ある介護事業の経営者の方とエンゲージメント(愛社精神・会社への愛着心)についてお話をさせて頂いたのですが、その時に私自身は愛社精神をもって仕事をしたことがあるだろうかと思いました。

振り返ってみますと、前職のパナソニック エイジフリー(株)に勤務していたころ、愛社精神をもって仕事をしていたなと思います。

1997年8月、松下電工(株)が介護事業としてスタートしたナイスケアサービス(株)(現・パナソニック エイジフリー(株))に、介護付有料老人ホームのオープニングスタッフの人事主任として、ホーム開設約1年前に入社しました。

入社した初日には、松下電工(株)の会長、社長のところへご挨拶に伺いました。今振り返りますと、子会社の一社員にすぎない私たちを、会長、社長に引き合わせてくださるといふのは、大変光栄な事だったなと思いますし、それだけ新規事業として期待もされていたのだと思います。

最初の1週間ほどは、松下電工という会社について、様々な角度から紹介をしていただきました。

まずは、松下幸之助社長の創業時からのお話、松下での日常業務をする上での心構えを示した「信条」「松下電工の遵奉すべき精神」について、じっくりと時間をかけて説明をしていただきました。また松下電工には様々な事業部があり、様々な商品を扱っていましたが、それぞれの部門の方々がその事業や商品への思いを熱く語って下さいました。

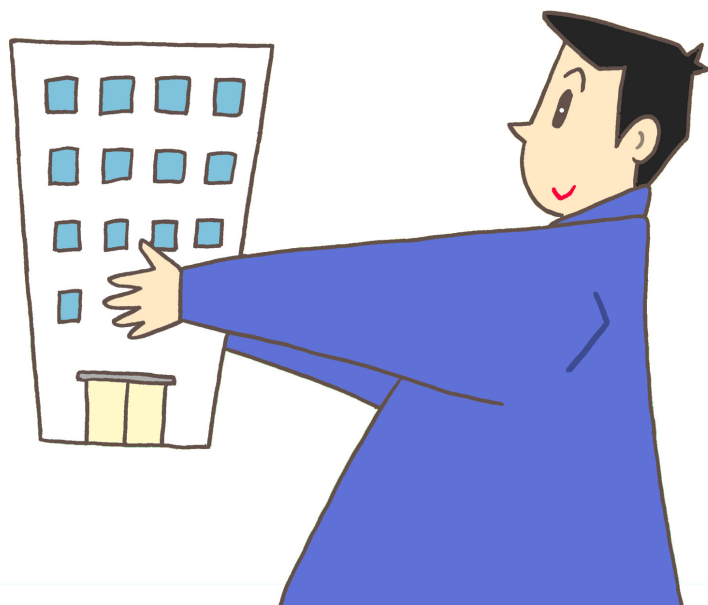
開設準備室は松下電工の本社敷地内にあり、松下幸之助歴史館も歩いて行ける場所にあり見学に行きました。創業から現在にいたる様々な商品やその時々の幸之助社長のお写真も展示され、この会社の歴史を感じることができました。改めてこの会社に入り、新規事業としての介護事業で仕事をしていくのだなと、心の中に仕事への思いが強くなっていきました。

松下電工について様々な方からお話をお聞きした後、これから始める介護付き有料老人ホームについて、理念・行動指針に込められた思い、当時入居費用が日本でベスト3に入る高価格(入居一時金3,000万円、月額利用料25万円)のホームをお客様にご満足いただけるサービス提供ができるように作り上げていくことを、(ナイス ケアサービスの)社長から熱い思いを込めて聞かせて頂きました。

この開設準備段階で、介護・看護・食事・生活相談・人事の責任者7人がプロパー社員として入社し、開設に向けて準備を始めました。其々の部門の責任者は、社長から一人ずつ呼ばれて、最初にやるべきことの指示を受けました。私の場合は「垣内さん、あなたの最初の仕事は就業規則を作ることです。就業規則は11月末までに完成してください。作成に必要な参考資料は揃えていますが、さら必要な情報や相談したいことが出てきたらいつでも言ってください。」と言われ、厚さ10センチくらいの資料を受け取りました。

その作業を進めながら、定期的に全員が集合し、進捗状況の報告や時に相談をしながら、準備を進めました。

その後も、人事関連の仕組みと様々な帳票作成、入居者への請求業務の仕組み作り、フロント業務の仕組みづくり、ホームの共有エリアの装飾品・来客用の湯呑やコーヒーカップ等の選定、ユニフォームの決定、新入社員の受け入れ準備等、様々なことに関わり、あっという間に翌年7月の開設を迎えました。



この準備をする間も、社長の介護事業への思い、特に「理念・行動指針」に表現されていることを実践していきましようとは何度もお聞きし、特にお客様に満足していただけるサービスを提供するために、環境はどのように整えるべきか、どのような関わり方をすべきか、介護・看護の場面で、フロントで、入居前の相談時に、具体的にどのように対応しようか、また新人たちをどのように教育しようかと、何度も話し合いを重ねました。

また、私たち開設メンバーが疑問をもったり、わからないことが出てくると、コンサルティングをお願いしていた会社や同業の先輩企業に問い合わせをしてくださるなど、常に寄り添いながら、私たちが準備をしやすいようにサポートしてもらいました。

そのような社長の姿勢から、私たちはこの人についていきたい、この人の元で仕事をしていきたいと皆が思っていました。そしてそれが、仕事の遣り甲斐にもつながり、愛社精神にも繋がっていったと思います。

社員に愛社精神をもってもらうには、経営者がこの会社・事業をどのようにしていきたいのかという方針を明確にし、それを理念・行動指針に表現し、そのことを常に言い続け、伝え続け、経営者や管理職はそれを自ら実践する事が、おのずと部下である社員に伝わっていくように思います。

その上で、常に社員を育てる、学びの機会を与え、スキルアップさせていくことが大切ではないかと思います。

また、新人入社時には会社創業の思いや沿革を伝えることで、社員の心に刻まれ、この会社を存続し次の代に引き継いでいく礎になるのではないかと思います。



垣内 イスズ